

## 論文の和文要旨

論文題目

バツァ語の記述研究  
—その音声、音韻、文法—

氏名

神谷俊郎

本論文は、南アフリカ共和国に話されるバツァ語 (isiBhaca) について、筆者が現地で行ったフィールドワークによる成果を記述研究としてまとめ、提示するものである。バツァ語は、南アフリカ共和国南部の、主として東ケープ州東北部に居住するバツァ族 (amaBhaca) によって話されるバンツール系の中のングニ系の一言語である。南アフリカに居住するングニ系民族は、コサ、ズールー、スワティ、ンデベレが主要構成民族として知られているが、これら以外にも、少数民族が幾つか存在する。彼ら少数民族は、人口規模や居住地域面積などが小さく、南アフリカ国内においても、あまり広くは知られていない。バツァ族も、このような少数民族のひとつである。

バツァ族の居住地域は、コサとズールーという大文化圏の狭間に位置している。バツァ族の多くは、現在、ズールー語またはコサ語を日常的に話しているが、バツァ族に固有の言語を話す人々もわずかに残っている。この固有の言語が、本論文の主題であるバツァ語である。

バツァ語は、一般的には、スワティ語の一方言とされているが、興味深いのは、バツァ語の話されている地域の地理的位置と、周辺諸言語との関係である。ングニ諸語はいずれも文法構造が共通しており、相互理解もほぼ可能であるが、バツァ語は、特に音声・音韻面において、スワティ語に共通した特徴を示す。スワティ語は、バツァ語域から東北に 500 キロ以上も離れたスワジランドを中心に話されている言語である。つまり、バツァ語は、スワティ語から遠く離れ、コサ語圏とズールー語圏の狭間に位置する一種の言語的孤島を形成している。

アパルトヘイト政策による民族的枠組みの人為的操作と土着文化の破壊により、バツァ族のような少数民族の存在は、過去半世紀に亘り無視され続けてきた。このためバツァ語は、これまで、研究対象として顧みられることはほとんどなかった。本研究は、このような「大言語に取り込まれ、消滅しつつある少数言語」に焦点をあて、ングニ諸語研究や、延いてはバンツール諸語研究の分野に新たな視点をもたらすことを目的としたものである。

本論文は全6章よりなる。第1章では、バツァ語とバツァ族に関する概要を説明する。第2章では、バツァ語の音声学・音韻論的な特徴を述べる。第3章では、バツァ語の文法事象についての網羅的な記述を試みる。第4章から第6章までは、特にバツァ語の音調現象について詳細に論じる。各章の構成と概要は以下の通りである。

第1章では、以降の議論の導入部として、バツァ族とバツァ語について概観する。

1.1節では、バツァ族とバツァ語圏の地理的位置について確認する。

1.2節では、バツァ語の言語学的な位置づけについて確認する。

1.3節では、バツァ族の歴史について説明する。この過程で、バツァ語が、なぜ、「母体」となるスワティ語圏から離れた地域で話されているのかという疑問について、人類学者 W. D. Hammond-Tooke の *Bhaca Society: a People of the Transkeian Uplands, South Africa* (1962) による先行研究と、筆者が収集した「近隣の強大民族であるズールー族の攻撃をかわすため、自らの言語特徴に変更を加えた」という歴史語りとを比較しながら、バツァ族の起源や来歴についての筆者独自の説を述べる。

1.4節では、文化や生活習慣の側面から、バツァ族と、コサ民族、ズールー民族、スワティ民族との関係、また、バツァ族が現在おかれている「被差別的」状況について述べる。

1.5節では、他のングニ諸語と比較して、バツァ語がどのような言語学的特徴を示すか、また、どのような点で周辺諸語と一致し、どのような点で差異を見せるのかについて説明し、バツァ語の独自性を浮き彫りにする。

第2章では、バツァ語の音声・音韻的特徴について述べる。

2.1節では、バツァ語の音節構造について述べる。

2.2節では、バツァ語の母音について、特に、母音上昇とよばれる、母音の異音交替について述べる。一般にングニ諸語では、/e/→[e]~[ɛ]、/o/→[o]~[ɔ]のように異音交替が生じるとされているが、筆者が耳にした限り、バツァ語では異音間の聴覚上の差異が、それほど明瞭ではない。このため、機器を用いた計測を行い、この母音上昇の妥当性について論じる。

2.3節では、バツァ語の子音について述べる。バツァ語の子音は非常に多いため、網羅的なリストを提示する。

2.4節~2.8節では、特徴的であると思われるいくつかの音声・音韻論的現象について説明する。これには次のようなものが含まれる。2.4節：デプレッサーと呼ばれる特徴的な子音について、2.5節：母音前に付随する声門閉鎖音について、2.6節：入破音について、2.7節：無声無気クリック音における声門閉鎖の要素について、2.8節：/th/→[tʰ]~[tʰ]、/d/→[dz]~[d]のように現れる異音交替 (P/A 分布) について。

2.9節では、形態素配列と音韻論プロセスによる音変化について述べる。

2.10節では、名詞と動詞の語幹内における子音の表れの制約について述べる。

第3章では、バツァ語に現われる品詞の諸特徴、および文法の概要について述べる。

3.1節では、名詞について、形態論的構造、クラス分類、接辞類による派生、名詞述語文

での用法などについて述べる。

3.2 節では、動詞の構造と用法について述べる。3.2.1 項～3.2.3 項は、主として動詞の語構造について、3.2.4 項は、主として動詞の時制、相、法の活用についての記述である。

3.3 節～3.10 節は、名詞と動詞以外の品詞や語形成要素についての記述である。3.3 節：助動詞、3.4 節：独立代名詞、3.5 節：指示詞、3.6 節：数量詞、3.7 節：形容詞、3.8 節：関係詞と動詞の関係法形、3.9 節：所有辞と所有代名詞、3.10 節：疑問詞。

第4章以降は、バツァ語の特に音調現象について詳細に論じたものである。

第4章は、後続する第5章「名詞音調」、第6章「動詞音調」への導入として、バツァ語の音調の基本的な事項について述べる。

バツァ語の音調は、音韻的には、高音調 H(igh)と低音調 L(ow)が対立する。また、固有に下降調  $\hat{\text{H}}$  をもつ形態素があるが、長母音化する次末音節の位置にしか現われない。

音韻的な意味での音調は、基底表示と表層表示、また、両者間の派生過程を含め、H、Lの組み合わせで表すことができる。しかし、音韻的表層表示がそのまま実現音声として現われるわけではない。音韻的な音調配置が決定したあと、音声実現に至るまでには、デプレッサーに伴う様々な音変化、ダウンドリフト、ダウンステップ、H音節の影響によるL音節のピッチの上下、など、さまざまな音声的諸現象が介入し、最終的な音声実現に至る。第4章では、これら音声的現象について説明し、次章以降の議論のための前提を提示する。

第5章では、バツァ語の名詞の音調について、分析する。名詞語幹は、音節のいずれかに高音調 H (下降調  $\hat{\text{H}}$  における H を含む) をもつ高型語幹と、音節がすべて低音調 L の低型語幹に分類される。高型語幹は、語幹の音節数に応じて、さらにいくつかの音調型に分類される。一方の低型語幹は、語幹音節数を問わず一型である。

バツァ語の名詞はすべてのクラスに冒頭母音をもつ。冒頭母音は、基底段階で常に H を担っている。この H は、一定のパターンにしたがって語の後部へと移動して実現される場合と、そのままの位置で実現される場合とがある。名詞接頭辞は、基底段階では L をもつ形態である。名詞を語全体としてみると、H の位置は、語幹の音調型と音節数、名詞接頭辞の音節構造によって決定される。

5.1 節では、名詞の構造について、議論に必要ないくつかの要点について再確認する。

5.2 節では、名詞語幹音節数の少ないものから順に、1～4音節語幹の、音調の表れについて観察、分析する。この過程で、高型語幹の音調パターン of 規則性を探したが、そのパターンが非常に不規則にしか現れないという結論しか導き出せなかった。

5.3 節では、前節での説明の枠外にある、例外的な表れを示す名詞音調について述べる。

5.4 節は、名詞接頭辞における、音節構造と音調の相互関係の中から現れる、ダウンステップとデプレッサー・シフトに関する事例を取り上げ、分析する。

第6章では、バツァ語の動詞音調について考察する。対象としたのは、不定詞形、直説法形、接続法形、分詞法形、関係法形、命令法形における音調の現われである。バツァ語の動詞語根は、基底音調によって高型と低型に分かれる。高型では、形態素としての動詞

語根が高音調（H）をもつ。低型は、語根にHを持たないものである。

動詞音調は、基底段階でのHが、もとの位置の音節を離れて、後方（右方向）へ移動して実現される「移動音調パターン」と、語根の音調型を問わず、語としての音調の枠（HやLの位置）があらかじめ決まっている「固定音調パターン」のいずれかで現われる。「移動音調パターン」は1つの型しかないが、「固定音調パターン」には幾つかの種類が現れる。

「移動音調パターン」は、不定詞形や直説法現在時制形など、比較的基本的な活用形に多く見られる。「固定音調パターン」は、各活用形の否定形や、時間的に遠い時制、直説法以外の法（分詞法形や接続法形など）のような活用形に多く見られる。

動詞活用形の網羅的な記述と分析から、動詞音調は固定音調パターンには基本的な4種類があること、また、Hをもつ形態素が二つ並ぶ場合に、前方のHが消失する「H消去規則」が、さまざまなバリエーションで機能することが明らかにされる。